

## 過去に出会う

おかげさまで、皆様のご協力により、いよいよこのお盆明けには本堂・客殿・山門の復興工事が着工の運びとなりました。衷心より深く感謝いたし厚くお礼を申し上げます。

さて、私は震災から二年半あまりの時間の中で、本堂や山門といったお寺の建物の持つ意味を繰り返して考えて続けてきました。かたちについては、去年の夏の『あみたあばあ』に書かせていただいたように、本堂は瓦葺き入母屋造りという誰もが一目で何の建物かわかるかたちが大切で、ここにお寺があります、ということが重要だと思います。街並みの中で、神社の鎮守の森とともにお寺の本堂の大屋根は、地域の人々の心に宗教的な安らぎを与える象徴性を持った存在です。それと同時にお寺の持つ意味は、ご先祖様をお祀りし、お墓にお参りする「過去に出会う」場であるということではないかと考えます。

「過去」を大切にしない近代的な科学技術万能の時代は、早大の大槻教授のように火の玉の研究により火の玉は雷の一種であつて人魂ひとたまではない、だから、人魂ひとたまはないのだから霊魂もない、俗にいう超常現象も否定する、といった現在の科学で発見された法則にすべてを当てはめる還元主義に陥つた考えを生み出していきます。大槻教授の基本的立場は、アインシュタインの「相対性理論」を打ち負かせたボーアの「量子力学」によるから正しいと主張されるのですが、「量子力学」を、現世以外の世界の存在の証明だと正反對の解釈する立場の人たちもいるわけですから、当てにはなりません。科学で証明されないものをすべて単純に否定することの危険性に気付くことが大切だと思います。

この夏の直木賞を受賞された浅田次郎という作家がいます。対象となつた作品は『鉄道員』ほつばやという作品です。この『鉄道員』ほつばやは短編集ですが、その中に流れる一貫したテーマは「過去に出会う」ことだと感じ

ました。「亡くなった人」に出会う場面は、一つ間違えは怪談・怪奇スリラーになってしまいましたが、情感あふれる印象的な場面ばかりで心に残る作品となっています。私が浅田作品と出会ったのは、昨年直木賞大本命といわれていた『蒼穹の昴』<sup>そうきゆう</sup>からですが、それ以前の『日輪の遺産』や『地下鉄に乗って』<sup>メトロ</sup>という代表作にも「過去に出会う」というテーマつまり、「亡くなった人」に出会う場面が作品の前提としてあります。『鉄道員』<sup>ぼっばや</sup>同様そこには「亡くなった人」と出会うことで作品が成立します。これらの作品に感動し共感することで、読者も自ら「亡くなった人」と出会う可能性を自然な気持ちで認めることができるようになるように思います。そしてそれは、心が豊かになることに他ならないと思います。

近代的な今日の社会は「死」というものを隠そうとする構造になっています。神戸で起こった少年によるショッキングな事件では、いろいろなことがいわれていますが、小学生の時の祖母の死が、死への関心のはじめであつたという報道は、「死」を隠した近代的な新興住宅地の欠陥を露呈しているかのようです。突然「死」というものが目の前に現れ衝撃を受け理解する前に、すぐに「死」を隠した日常に戻ってしまったことで、「死」への関心が異常化し暴走し始めたのではないのでしょうか。少年の絵がユング心理学にいう危機的な状況で現れるマンダラであると解釈できると心理学者はいいます。マンダラは誰の心にも現れます。であるなら、生まれつき少年が異常な精神の持ち主であつたのではなく、他の子供に比べて育つ環境に極端に影響を受けやすかつたのかもしれない。哲学者のハイデッガーは「ひと」は死を忘れようとする日々の生活に埋没するものだといっています。しかし、本当に忘れ去っては人間として本当の生き方そのものを見失ってしまうのです。「過去に出会う」ことで「死」を思いだし理解する場、それがお寺の大切な役割だと思えます。本堂の大屋根が地域にあり、日々、人々がそのかたちを無意識のうちに目にすることで、子供たちの心の成長や人々の精神のバランスを保たせる大きな役割を果たすことになるのだと思います。やがて、一年後に再び姿を現す大屋根には、そのような役割を担ってもらいたいと念願しています。